

## 研究会報告

一九八五年度第一回研究会（一二月二〇日）

テーマ アメリカ社会のいわゆる保守化と私の経済史研究

報告者 高橋和男

### 報告要旨

一 昨年から昨年夏にかけて合わせて八カ月間、フィラデルフィアのペンシルヴェニア歴史協会と隣りのデラウェア州ウィルミントンのハーグリー図書館に通い、十九世紀アメリカの千年王國的資本主義観を最も雄弁に説いたケアリー(Henry C. Carey 1793—1879)の主にビジネス活動に関する史料を漁った。一八三〇年代にペンシルヴェニア北東部で無煙炭の採掘が本格化すると同時に、ケアリーがスクールキル郡に広大な炭鉱を事業仲間と一緒に所有していたことまでは、イヤーリー教授の *Enterprise and Anthracite: Economics and Democracy in Schuylkill County, 1820—1875* (1961) がすでに明らかにしていた。この本の中でイヤーリーは、南北戦争後の過剰生産および技術革新がもたらした瀝青炭との競争によるペンシルヴェニア無煙炭産業の斜陽化、そしてレディング鉄道による炭鉱の独占・支配、という資本主義発展の文脈において、「経済学のイデオロギーへの屈服」という命題を論証しようとした。「イデオロ

ギー」というのはドグマ化した「ジャクソン民主主義」のことである。因みに、イヤーリーが利用できなかったレディング鉄道会社のファイルが、幸いなことに今日、ペンシルヴェニア歴史協会の委託によりハーグリー図書館で一部未整理ではあるが公開されている。私はケアリーとこの独占的企業との間の太い人的、金融的つながりを示唆する意外な証拠をいくつか発見したが、この意味については今後の研究の中で明らかにするつもりでいる。

ところで、イヤーリーの研究に私がとくに惹かれる理由は、四半世紀前のアメリカ・リベラリズムの思想的痕跡がその問題意識にはっきりと印されているからである。たとえば、手っ取り早くあげられる利益を目あてに殆ど徒手空拳で採掘に参入する炭坑経営者や坑夫は、「事業そのものへの献身」という職業倫理とは無縁で、彼らの競争的経済の非能率が独占を生み出した、とか、政府の拡大よりも経済の拡大ばかりに国民が血道をあげていたことが、(州)政治の工業化の進展への対応をおくら

せた、といったまるでガルブレイスばりの指摘がそれである。この点に関連して、滞米中偶然テレビで観たエリア・カザン監督の一九六一年製作の映画「ワイルド・リバー」(モントゴメリー・クリフト&リー・レミック主演)は実に啓示的であった。カザンはTVAに反対する農民のおそろしく自己中心的、個人主義的な行動様式、アメリカ人のいわゆる“rugged individualism”をこの映画で描いていて、私はスクールキル郡の炭坑経営者や坑夫のエートス(人間類型)を理解する恰好のヒントを得ただけでなく、それと同時に、TVAが体現する思想の進歩性にも強い印象を受けたのである。

イヤーリーの研究あるいはカザンの映画から四半世紀後の今日、周知のように、ニューデールの諸シンボルの解体が、かつてそれが克服すべき対象とした思想によって進められている。ホレイショ・アルジャーイズムに象徴される自由放任主義は、アメリカ社会が危機に見舞われるたびにつねにそこに回帰するアメリカ的な「歴史意識」、つまり「アメリカニズム」にほかならない。実際、『ワシントン・ポスト』(八五年五月一日付)は、アメリカ社会統合の原理として自由競争原理をまじめに提唱する論説“Why Can't We Be More Like Japan?”を載せ私を少なからず驚かせた。

こうした現代アメリカの保守主義は、因果なことに、「自由主義の中で最も非保守主義的な内容とダイナミズムを持つ」(佐々木毅)、あるいは「最も過激な保守主義」(ターレンドルフ)と指

摘されるような一面をたしかに持っている。しかしかかる評価は、経済成長、投資、生産性といった次元だけで論じる分には通用するにしてもいや、通用しないかもしれない、社会正義や福祉の次元でそのまま妥当するわけではないだろう。『ワシントン・ポスト』の記事のように、「間違いない自分はその社会の一員であるという感情」を国民に植えつけるために、十九世紀的な自由競争原理を社会統合の柱に据えるというのでは、そうした価値観の人間生活のあらゆる領域への適用、言い方をかえれば業績主義にもとづく人間の一次的評価、こそが国民相互の連帯感の形成を妨げているという現実を全く無視するものである。

今日のアメリカ資本主義の危機といわれる事態は、たんにアメリカ的生産方式の旧式化というようなことではなく、資本の論理もしくはビジネス文明万能の「アメリカニズム」という本質的に非歴史的なイデオロギーそのものが問い直されているとみなければならぬ。翻って、私がイヤーリー教授の驥尾に付して、ケアリーの千年王国的な資本主義観にアンビバレントな関心を寄せるのもかかる文脈においてなのである。

八六年四月十一日提出